

「五・三〇運動」と日本労農運動家

——鈴木文治、賀川豊彦、芳川哲の軌跡

浜田直也

はじめに	211
I 鈴木文治と「五・三〇運動」	212
II 賀川豊彦と「五・三〇運動」	219
III 芳川哲と「五・三〇運動」	225
おわりに	228

はじめに

鈴木文治（1885–1946）、賀川豊彦（1888–1960）、芳川哲（1877–?）は、大正デモクラシー期の労働組合・農民組合運動の指導者である。鈴木は労働運動（友愛会）の、また賀川は農民運動（日本農民組合）の創始者として知られ、芳川は官業労働組合運動の先駆者として知られている。彼等は、1925年2月に上海の「在華紡」（日本人経営の在華紡績工場）で起こった労使紛争に端を発し、5月以降、反帝国主義運動「五・三〇運動」に高揚した労働争議と関わりをもっている⁽¹⁾。

鈴木は、「五・三〇運動」の初期段階で国民党系の統一労働組織の上海工団連合会と接触しこれとの連携を模索し、賀川と芳川は運動の終焉期に共産党系の労働組合である上海総工会と接触する機会をもっている。彼等に共通することは、ともに中国人労働者の立場に立つ発言と行動をおこない、武力弾圧にまでおよんだ運動を憂い、その解決に奔走した結果日本政府と対峙したことである。

ところで、当時の日本の知識人の対「五・三〇運動」観を如実に物語るものとして、横光利一の小説『上海』（改造社、1932年）がある。彼は小説の時間的な枠組を決める際に、1925年に反日運動が沸きたった「五・三〇事件」を選んだ。横光は、『上海』のなかで、

次のように記している。

国貨の提唱が始った。日貨の排斥が行われた。そうして、支那人紡績会の集団は、今こそ支那に、初めて資本主義の勃興を企画しなければならぬ機会に遭遇したのだ。……支那では、こうして共産主義の背後から、此の時を機会として資本主義が馳け昇らなければならなかった。

横光は、国産品愛用、外国製品排斥をスローガンとする反日運動は、共産党の扇動したものであるが、その背後には国産品の販売増進を狙う民族資本主義の計略が絡んでいるとする。彼には、「五・三〇運動」を理解するうえで中国人民の立場に立つ視点はなかった。彼は、反帝国主義運動に立ち上がった中国人民を、暴徒化した群集としてしか描いていない⁽²⁾。

そもそも、第一次世界大戦後、中華民国の労働運動は、一時退潮の状態にあったという。しかし、上海の「在華紡」の中国人労働者が待遇改善などを要求して「罷業」(ストライキ)を起こしたことを機に、労働運動は再燃した。当初は、1924年に組織された上海工団連合会が争議を指導したが、1925年に至って中国共産党が総工会を組織した⁽³⁾。

共産党は、5月15日に「在華紡」の日本人工場管理者が職工顧正紅(本名顧正洪、当時20歳)を射殺した事件を利用して、彼を「革命烈士」と讃えて、中国人労働者・学生の義憤と民族意識を呼び起こし、工団連合会にかわって運動の主導権を握った。さらに、5月30日、「打倒帝国主義」「反日民族主義」をスローガンに決起した労働者、学生のデモ隊に対して租界工部局のイギリス警官隊が発砲し、デモ隊のなかに多数の死傷者を出し、上海市内は市街戦の様相を呈するようになり、中国人民の反帝国主義運動は高揚した⁽⁴⁾。

本稿は、鈴木文治・賀川豊彦・芳川哲が、「五・三〇運動」前後に上海を訪れ、労使紛争の起こった「在華紡」を視察し、中国の労働組合と連帯し、紛争の調訂を模索したことを考察するものである。史料としては、中国側では国民党の機関紙『民国日報』、『時報』、日本側では日本友愛会・労働総同盟の機関紙『労働者新聞』、『東京朝日新聞』、『大阪毎日新聞』等を取りあげ使用することにする。

I 鈴木文治と「五・三〇運動」

1925年2月、上海の「在華紡」である内外綿花紡績工場における「少女童工」(女性・少年労働者)虐待事件に関連して、労働条件の改善と賃上げを要求する労働争議が勃発し

た。上海の労働運動の潮流は新しい局面を迎えていた。この動きに日本の労働界も機敏に対応し、現地を訪れての視察と調査が行われた。

1925年4月、日本労働総同盟会長の鈴木文治と代表団は、ILO（国際労働機関）がスイスのジュネーヴで開催した第7回国際労働者会議に出席するための渡欧の途上に上海を訪問し、労働団体関係者、上海の米国・日本人 YMCA 関係者等と交流し、労働争議が起こった「在華紡」の工場を視察し、労働運動に関する講演をおこなっている。

鈴木と上海工団連合会（1924年3月8日結成）の関係者との繋がりや、「五・三〇事件」が起こる前年の1924年に始まっている。当時、鈴木は、ベルリンで開催された第6回ILO国際労働者会議に出席するため渡欧したが、その際にも上海に立ち寄っているのである⁽⁵⁾。

鈴木滞欧は4月30日から5月3日までであった。その際に中国における第1回の労働節（メーデー）に出くわし、これに列席し、日中の労働者の連携を主張する演説を行っている。内山完造の回想によると、鈴木メーデー会場の壇上での第一声は「支那の兄弟よ」であったという⁽⁶⁾。

これは現地の新聞の報道するところとなった。例えば、「五一労働記念大会誌盛」（『民国日報』1924年5月3日）に次のように記されている。

五一労働記念大会、前日下午在北河南路天后宮举行、到会团体、有中華労働連合会、……商務書館工人会等五十餘起、人数在二千以上、……▲開会情形 一時半開会、公推徐錫麟主席、謝作舟報告五一史略、繼請印度人謝思脱、日本労働総同盟会長鈴木文治、会員西尾末広、英国安特生女子、及汪精衛、邵力子、靳經緯、曹斌、陳鍾柔、徐翰臣等相繼演説畢、唱労働八点钟紀念歌、……「鈴木文治」余等受国内労働界之委託、出席日内瓦之万国労働大会、今日得與盛会、実覚荣幸、目下日本労働会情形、已日見進歩、京都大阪神戸等処、今日必均有極嚴整之遊行演説、世界労働者之結合、雖有言語文字風俗人情之不同、而無所隔閡、実因此種結合是人道的表現、中日印度同处一洲、实行團結、尤為重要、苟亞洲労働者團結一処以推翻資本家之压迫、則東洋和平、始有希望、而世界和平、亦得藉以促進、亞洲労働団体、不在少数、然與歐美比較、則相差遠甚、其中原因、实由於組織之不良、此点甚望加以改良。余在滬不久、即須赴欧、甚願中国労働界有良好之組織、茲謹代表日本労働団体、向諸君表示極願携手之至意、并祝中国労働者万歲、

鈴木は、メーデーの会場となった天后宮で、上海工団連合会長の徐錫麟や宣伝部長の謝作舟と出会っている。また、国民党の汪兆銘、共産党の邵力子とも会っている。

とりわけ、2日の午前中に、鈴木文治が、日本労働総同盟会長の肩書で上海河南南路蓬萊路の日本人倶楽部で、国民党上海執行部の中執委であった汪兆銘（汪精衛、1883-1944）と会談したことは、その後の国民党と日本の労働組合との提携の布石となる役割を果たしたと言える。

また、『労働者新聞』に載せられた鈴木随行員の西尾末広（政治家、1891-1981）の手記によると、同日に西尾は、上海工団連合会の事務所を訪ね、組合幹部等と意見交換をおこなっている。「五・三〇運動」前年における、鈴木や西尾の行動は、日中労働者の間に階級意識に基づく連携の礎をつくったのである。このことが、翌年にまで余韻を残すことになるのである⁽⁷⁾。

鈴木は、2日の夜、日本人倶楽部で開催された講演会でも、日中の労働運動の連携の急務を語ったという。そのなかで、日本の労働組合で統制のとれた示威運動がなされていること、また、世界の労働者は肌の色、言語、文化、習俗の違いがあったとしても、それを超えて団結しなければならない、と語っている。

さらに鈴木は、日本、印度、中国は同じアジア地域に属していて、より団結すべきで、3国の労働者が団結して資本主義の圧迫と闘えば、東洋の平和が達成され、延いては世界平和が実現されると高唱している。その後、鈴木等は、3日の午後、日本郵船の香取丸でヨーロッパに向かったという⁽⁸⁾。

香川孝三は、鈴木文治の1924年の上海訪問を日中労働運動史の画期的史実として評価し、これを契機にはじまる日・中・印3国の労働組合をメンバーとするアジアの統一労働組合の組織である亜細亜会議の盛衰を論じている⁽⁹⁾。

鈴木は、1925年4月に第7回ILO国際労働者会議に出席する途上、再度上海を訪問したが、おりしも、彼の地の「在華紡」では、2月に「童工」（未成年労働者）の劣悪な労働待遇をめぐって中国人労働者の抗議運動が起こっていた。そのため、鈴木等の上海の労働組合等への親善訪問は、中国側に鈴木等への親近感を抱かせたようで、代表団の行動が新聞報道になっている。例えば「日労働代表昨日抵滬」（『民国日報』1925年4月3日）の他、「日労働代表昨日抵滬」（『時報』1925年4月3日）には次のように記載されている。

日本出席第七次国際労働會議代表鈴木文治氏、昨日上午七時乘鹿島丸郵船抵滬、赴輪埠迎迓者有前協調會婦女労働部員山田子女史坂本太代子夫人及日僑青年會幹事内外紗廠等職員多人、現定今晚七時、在日僑俱樂部舉行演講大會、鈴木氏及山田子女史演講「日本之労働問題」、坂本夫人及内外紗廠岡田氏演講「童工問題」、坂本夫人等受工部局委託、研究此項問題已久、頗有心得、鈴木亦研究労働問題有年、屆時必一番宏論、

日僑工部局董事桜木俊一氏擬將演講之討論結果、建議於本屆西人納稅會、

鈴木文治は、1925年4月2日午前7時、上条愛一を連れて日本郵船の鹿島丸で上海に上陸した。鈴木は、上海で友愛会の婦人活動家の山田やす子と上海日本人YWCAの坂本たよ子、及び内外綿花紡績の職員等の歓迎を受けている。その日の夜7時には日本人倶楽部で山田女史とともに「日本の労働運動」という演題で講演をおこなっている。

この際に、鈴木は、前年の講演でも述べたように、日中労働者の提携がアジア人に対する差別的意識を打ち崩すことになるかと述べている。とりわけ、鈴木豊かな労働運動実践に基づく見識は、その視野の広さと卓見が評価されたという。講演会の場で出た意見は、工部局幹事であった桜木俊一によって外国人経営者の経済・親睦団体に報告されたという。工部局は、列強が上海共同租界を統治するために設置した自治行政機関で、中国人労働者とは対立関係にあった。

当時の様子について、随行員の上条愛一の滞在記に次のような記事が残されている⁽¹⁰⁾。

上海に四月二日午後一時入港、同日日本基督教青年会前田主事の案内で市中を見物して一泊。翌三日は先般大罷業がありました内外綿花紡績会社を参観しました。……私共は同夜、基督教青年会の鮑氏（大阪にも数年労働してみたといふ支那の人）の斡旋で、上海の労働団体の人々と日本人倶楽部で会談する事になりました。参られたのは上海工団連合会の朱潤斌及び黎世良両氏でありました。

滞在中、鈴木文治は、上海日本人YMCA主事前田寅治（在任1920-1925）の世話になっている。前田は、1920年に上海に赴任する前は大阪YMCAの役員をしていて、上海では内山完造とともに日本人基督教徒の指導的役割を担っていた。鈴木は、短い滞在時間のなか、翌3日、2月に労働争議が起こった内外綿花紡績の工場を視察している。また、前年に交流を持った上海工団連合会の幹部の朱潤斌とも会談し意見交換をおこなっている。

朱潤斌は、製墨労働者出身で安徽旅滬总工会や右派国民党系の工団連合会の会員でもあり、「在華紡」との労使交渉を反共主義、労使協調主義で貫いた労働運動家として知られている。例えば、「日紗廠罷工仍難解決」（『民国日報』1925年2月19日）に次のような記事が見える⁽¹¹⁾。

本埠上海紡織工会……等二十餘工団代表五十四人、於昨晚六時、在上海工団連合会開維持日商紗廠工友罷工委員會連席會議、……張翼成 袁曉嵐 朱潤斌 蔡臨川為調

査股委員、

江田憲治によると、上海の労働運動は、1925年までは国民党系の上海工団連合会が主導権を握っていたが、同年2月に起こった「在華紡」の内外綿第8工場での労働争議を分岐点として、工団連合会は分裂し共産党派の勢力が握るようになり、「五・三〇事件」以後は共産党の主導権が確立したという⁽¹²⁾。

上海工団連合会は、1924年、同年の秋に開催予定の国際労働者会議に代表を派遣することを表明していたが実現しなかった。また、1925年にもオランダのILO支部を通じて中国における労働問題に関する報告が求められ、翌年の国際労働者会議への出席も奨励されていた。

上海工団連合会がILOに頼って中国人労働者の労働条件の改善を目論んでいたことは、暴力的実力行使によらない労使協調路線での「現状打破」を目指す鈴木の活動方針と合致するところではなかろうか。彼等の動向は、鈴木も耳にも入っていたかもしれない。「工連会函万国労働会」（『民国日報』1925年4月1日）に次のようにある。

上海工団連合会昨覆囑阿姆斯特登城万国労働会一函、其文云、敬覆者、接奉二月十一日貴会来函、並星期惠寄労働報告、均經按期繙成華文、分佈全国工団、俾知国際間労働運動之進展、得資借鏡改進之处、实深感紉、仍望按期照寄以通消息、再本年万国労働大会在何处举行、開会時期已否確定、即希速覆、以便連絡中国工界、推出代表遵章蒞会、茲奉上敝会発行之労働週刊、敬希不時指正為幸、上海工団連合会謹啓、

古厩忠夫は、中国共産党に結びつく以前の労働運動の再評価を提言し、小杉修二も、上海工団連合会に「現状打破の論理」を見出している⁽¹³⁾。つまり、上海工団連合会が、階級意識を共通基盤とし、ILOを介して、外国の労働者との連携を模索したことは、労働運動史において評価されるべき出来事ではなかろうか⁽¹⁴⁾。

中国側が記録した鈴木も上海での行動としては、「日労働代表由滬赴欧」（『民国日報』1925年4月5日）に次のような記載がある。

日僑基督教青年会前晚發起童工労働問題研究兼労働問題大演説会、由滬上日本三新聞社後援、七時後在蓬路日人俱樂部開会、……最後日本労働代表鈴木氏登壇、縦論對於日本労働運動現状、童工問題、及上海日商紗廠罷工之感想、約及一時間、聴衆甚為感動、至十時後散会、又日本労働代表鈴木氏前日並參觀日商内外紗廠工場、原約與中

国工会幹部会晤、因為時不及中止、已於昨四日晨、仍乘日郵船鹿島丸赴欧、出席日内瓦国際労働会議、

鈴木は、上海日本人 YMCA が主催した講演会で、前日の日本の労働運動の現状、「童工」問題に関する見解、また「在華紡」を視察しての感想を約1時間ばかり語り、聴衆の感動を呼んだという。くわえて、彼が内外綿の工場を視察した際、「工会」（労働組合）幹部と胸襟を開いて時間が許す限り会談しようとしたことが記されている。最後に、彼は4月4日に日本郵船の鹿島丸に乗船して訪欧の旅路についたとある。

一方、『労働者新聞』には、上海工団連合会と会談して知り得た、当時の労働組合の様子が上条によって紹介されている。それには次のようにある。

今回の労働会議に支那からも労働代表を送りたかつたのでありますが、孫逸仙氏が死去するし、費用其他の関係で実現出来なかつたのは残念であります。……内外綿花の大争議以来上海一帯の労働者の自覚は一段と進みつゝあり、之に対し官憲の圧迫は猛烈でために組合事務所の如きは転々として移り変らざるを得ない状態であります。然し吾々は此際確乎たる決意を以て労働階級の結束を計り、一日も早く支那に於ける労働運動の根底を固め、日本の労働者諸君と固き握手をして進みたいと云ふ希望を有してゐます。何卒今後一層の親交を祈ります。

また、代表団の上海工団連合会の幹部との別離の際の行動は次のようなものであった。

簡単に日本の労働運動の現状を語り、日本の労働者は心から支那の労働者諸君と相提携して、階級戦の戦線につかん事を切望してゐる旨を告げ、書信や機関誌の交換を約し、固い握手を交はして別れを告げました⁽¹⁵⁾。

鈴木等は、日本労働総同盟を代表して中国の争議団への支持を表明し、日中の労働組合による連合戦線の構築と、中国人労働者全体に対して階級意識の覚醒を期待していたのである。

鈴木は、ジュネーヴに到着して間もなく、同じく ILO 総会に参加するためにやってきていたインド労働組合の代表の訪問を受け、日中印3国の労働者の統一戦線の構想を聞き、日本・中国・印度3国の労働組合が連携して闘うことを決意したという。これについて、『労働者新聞』に次のように記されている。

昨夜、市中で印度労働代表（印度労働組合会議主事）に逢つて種々語り、尚会議中
適当の時に相会して懇談することに致して居りますが、同代表と日本、支那、印度等
東亜の労働者の大同団結の急務であるといふ意見の一致を見、同氏が東洋の労働組合
連合会議を開きたいと云ふ希望を述べましたので、自分も大体同意を表して置きました。

尚賀川豊彦氏が来る十九日にゼネバ着当地に一週間程滞在の由であります。取敢ず
右御報告まで、……

五月十五日ゼネバにて鈴木文治⁽¹⁶⁾

鈴木文治は、第7回国際労働者会議において、中国の労働組合の代表を正式招聘すること
を主張した。これは、鈴木にとって、上海で公約した日中労働者の連携の絆の証ではな
かろうか。例えば、『労働者新聞』には、鈴木がILOに提出した中国の労働組合代表団を
招聘することの要求書の趣旨書の要略が掲載されている。

拝啓海路恙なく五月八日マルセイユ着、十日無事当地に到着致しました。早速、協
議の結果去る十二日左の二決議案を事務局長に提出致しました。

支那の完全代表を労働総会に招致する事に関する決議案

支那の労働状態は、国際平和及世界の労働問題の解決に対し重大なる影響を與ふべ
きものなるに鑑み、近年支那労働者の覚醒は著しく、其の労働組合運動の発達の顕著
なるものあるに鑑み、支那の労働状態には改良すべき点多々ありと思料せらるるに係
はらず、一般に其の事情未だ十分に知悉せられざる状態にある事に鑑み、従つて支那
の完全代表の労働総会に出席するは国際労働機関の機能を完ふする事に貢献すること
甚大なるべきに鑑み、本総会は労働理事会に対し、将来の総会に於いて同国の完全代
表を招致し得る様、支那政府と協議し、適當なる方法を発見せん事を要望す⁽¹⁷⁾。

しかし、鈴木等の動議案は理事会に聞き届けられなかったのである。

また、鈴木は、ILO 国際労働者会議の席上、インド、オーストラリアの代表と連名で、
5月30日に勃発した上海の南京路でのイギリスの老閹警察官による中国人学生・労働者か
らなるデモ隊への発砲事件（所謂「五・三〇事件」）に対する調査請求を提出している。

この行動は、「国際労働会議に上海事件持出さる 日、印、濠三労働代表主唱で同情電
報を送る決議」（『東京朝日新聞』1925年6月10日）に記されている。

【ジュネーヴ国際八日発】目下国際労働会議出席中の労働代表間の会合において、今回上海の学生・労働者射殺事件が問題とされ、インド代表ジョン、濠洲代表ローソン、日本代表鈴木文治三氏は署名の上ステートメントを議長の手許に提出した。

結果としては、鈴木等のこの動議は、日本・英国政府と中国（段祺瑞）政府の裏工作によって、議題にのせられることはなかった。彼等は、ILOでこの事件を議論することで、中国の労働者への同情を集め、国際世論を呼ぶという目論みをもっていたが、それは結局は潰えた。

鈴木は、帰国後の談話でILOに対する失望を露わにしている。例えば「労働歌の揺ぎ菜葉服〔青色の労働服〕のうづ巻 帰京早々第一声を放ち行列で練る 鈴木代表帰る」(『東京朝日新聞』1925年8月13日)に、次のように記されている。

第七回国際労働会議に出席した日本労働総同盟会長鈴木文治氏は十二日午後八時三十分東京駅着特急列車で帰京した、……鈴木氏にはわか造りの踏台の上にスツクと立上り『今回の会議で私の痛感した事は我々は国際労働会議をのみ頼つてゐてはならぬといふ点である、我等は自力で向上し然る後に国際労働会議を利用するだけの意気こみでなければならない……』

これまでの日本近代労働運動史では、鈴木文治に対する評価は不当に低いものがあつた。彼が労働運動の理念として労使協調・非暴力主義に立つ政治姿勢を取つたことから、「ダラ幹」(俗語。墮落幹部の略)のレッテルが貼られることが多かつた。しかし、彼は、「在華紡」を拠点に大陸膨張主義を取る日本政府の圧力に屈せず、中国人民の立場に立つた「偃蹇不羈の徒」であつたのである。

松尾尊兌は、鈴木労働運動における功績を発掘し、彼が近代日本の労働運動に与えた影響の大きさを再評価した。その評価すべき点の一つとして、「五・三〇運動」への彼の関与が挙げられるのではなからうか⁽¹⁸⁾。

II 賀川豊彦と「五・三〇運動」

賀川豊彦に関する先行研究は多いが、彼が「五・三〇運動」の際に、上海に赴き中国人労働者と対話し、労働争議の発端である「在華紡」との調停に関与したことを紹介した論考は皆無である。

そもそも、『賀川豊彦全集』第24巻の「年表」をはじめ、他の賀川研究の専著に付された「賀川年表」にも、1925年の項にこれに関する記事はない⁽¹⁹⁾。

つまり、この事実は忘失されていたのである。しかし、賀川の上海での働きは、上海の新聞である『民国日報』『時報』などに残されている。

賀川が1937年に書いた小説『颱風は呼吸する』（第一書房、1937年刊）は、上海を舞台に、「五・三〇運動」から「第一次上海事件」（1932年）を時代背景として、魯迅（文学者、1881-1936）と内山完造（上海の書店経営者、1885-1959）の国家対立を超えた友情を描いた作品である。その中に次のように記されている。

翌日の新聞を見ると、果して内外紡績に大きな争議が起り、職工が硝子窓を無数にぶち壊したことが書いてあった⁽²⁰⁾。

賀川は、小説の中で1925年の上海最大の「在華紡」であった内外綿の労使紛争の様子を挿入している。つまり、彼にとって、上海の「在華紡」での労働争議を震源地とする「五・三〇運動」は小説の題材として取りあげる価値あるものであったのであろう。

賀川は、1924年11月に全米大学連盟の招聘を受け渡米する。当時、彼は杉山元治郎とともに苦心して育て上げた日本農民組合（1922年結成）が、共産党のオルグ活動によって瓦解し主導権を失いつつあり、本来日本を離れる時間的余裕はなかった筈である⁽²¹⁾。それにも拘らず、彼が渡米したのは、米国政府が、1924年に日本の移民を禁じる排日法を制定し翌1925年から施行したことに對する抗議行動（米国各地での講演会・伝道会）のためであった。

移民法に士気喪失して居る同胞の爲めには、倒れるまで彼等の意気を鼓吹せねばならぬと思ったので、時計の針の如く働くことを決心した⁽²²⁾。

しかし、賀川のアメリカ本土での移民法反対運動は奮闘むなしく徒勞に終わった。彼は、排日熱の強い太平洋沿での活動を終えた後、ニューヨークでの約1カ月の眼病の入院治療を経て、1925年3月にニューヨークからアキタニア号でイギリスに渡る。彼の地では東京帝大の蠟山政道と遭遇し、前首相マグドナルドと会見している。彼は、イギリスの労働・消費組合を視察し、デンマークの農業協同組合を視察し、数カ国を遍歴して、5月中旬にスイスのジュネーヴに到着し、ここで鈴木と合流している。賀川は次のように語っている。

ゼネバで鈴木君に会へるでせう。その頃、ゼネバで鈴木君を助けませう⁽²³⁾。

賀川は、ジュネーヴでは国際連盟事務局次長であった新渡戸稲造（1862-1933）の歓迎を受けている。その際、新渡戸は賀川に、ILOの「子女人身売買買禁圧会議」のメンバーを紹介したという。また、彼は賀川に対して、デンマーク型酪農業を日本で実践する計画を話し合ったという。賀川の手記には次のようにある。

新渡戸博士は親切にも私のために、子女人身売買買禁圧会議に来て居られた、知名の幹部を招いて午餐会を開いて下された⁽²⁴⁾。

賀川は、第7回ILO大会に鈴木とともに出席している。彼は、鈴木が会場で中国の労働組合代表の招聘と、「五・三〇事件」での労働者・学生の殺戮に対する調査の動議を提出した場面に同席している。ただ、帝国主義と資本家側の立場に立つILOの実情から、鈴木は奮闘むなしく提案は受理されることなく、彼等は傷心の帰国を余儀なくされる。

ゼネバでは鈴木氏と一緒にゐました。少しも興奮の無い集会で、全く事務的、法律会的の会合です。資本家側は法律家が八割をしめてゐます。各国が反動時代ですから、余程しつかりしないと、労働運動をつぶされます。私は二度とゼネバに行く気はありません。私は日本の外に用事ない男です…⁽²⁵⁾。

鈴木に同伴した上条愛一（労働運動家・友愛会幹部、1894-1969）は、賀川とメトロポールホテルに同宿していた。彼の手記によると、賀川は、1925年5月23日に日本の山陰地方で起こった北但大地震の新聞報道に接して、「上条君、僕は日本へ直行するよ」と語り、上条にホテルの滞在費の支払い金を託して、帰国を急いだという⁽²⁶⁾。

賀川の所期の帰国の旅程には、インドを旅行しガンディー（1869-1948）と会談することがもろこまれていた。

六月十九日熱田丸でコロomboに出で、コロomboから真夏の印度を三十三日間旅行し、ガンヂーとも会見した後、八月十八日神戸に着する予定である⁽²⁷⁾。

しかし、実際は、賀川は、熱田丸に乗り帰国の途についた。彼は、聖地エルサレムの参詣も程々にし、インド、シンガポールでは一時下船しただけで彼の地で旅行することもな

く、「五・三〇運動」の騒乱で租界当局、帝国列強の戒厳下に置かれていた香港・上海に直行している。そして賀川は、7月10日過ぎに香港に立ち寄って市内を視察した後、7月17日には帰国便の熱田丸を下船してまで上海に上陸している。彼は、4日間滞在し、市内で数度、中国人労働者のために講演し、労使紛争がおこった「在華紡」の工場を視察し、総工会等の指導部とも交流している。彼は、その後20日に日本郵船上海丸で上海を発ち22日に神戸に帰っている。

上海では、1925年7月に入って、総工会が指導したゼネスト体制は、総工会に対する総商会（民族ブルジョアジー）からの圧力によって動揺してきた。民族ブルジョアジーの牙城である総商会が、6月の工部局の対民族系工場への送電停止によって生産基盤を脅かされ、帝国主義に妥協する算段に出たことが背景にある。それにともない上海における中国人による対外国人暴力行為は見られなくなっていた。

つまり、賀川が上海を訪ねた時期は紛争が下火になっていた時期で、総工会幹部と直接交流する機会を持ちやすかったのではなからうか。

思うに、賀川の中国行きは、鈴木意向によるものではなからうか。鈴木は、「五・三〇運動」前夜の1924年5月と1925年4月に上海の労働組合の指導者と接触し、日中印3国の労働組合の連帯を誓っていた。また鈴木は「五・三〇事件」の報に接して憂慮していた。鈴木は、日本労働総同盟の会長として、スケジュールの変更が叶わぬ立場にいた。それ故、賀川に彼に代わって訪中することを依頼したのではなからうか。

賀川は、上海に到着した7月17日、現地の中国人労働団体と国民党・共産党側から熱烈な歓迎を受けている。「日本労農会長来滬」（『民国日報』1925年7月18日）には、彼の来訪について次のように記されている。

日本労農組合会会長賀川豊彦於日昨来滬、賀川為日本今日之著名労働運動実行家、学問道德為全国所欽仰、曾親居貧民窟與一般労働者同起居者卅年、領略貧民生活況味極深、遂努力提倡待遇劳工改良運動、著書甚多、如『跳過死線』『射太陽者』『愛之科学』、每一書出、不脛而走、此次在欧美考察労働状況、事畢返日、順道来滬、將向本埠各界有所講演⁽²⁸⁾、

一瞥して、この賀川の紹介文には誤りがある。当時、農民組合会長は杉山であり賀川は会長ではなかった。彼のスラムでの救済活動期間が30年というのも誇大表現である⁽²⁹⁾。

一方、賀川は、現地の『大阪毎日新聞』のインタビューに答えて、上海を訪問した意義について次のように答えている。

【上海特電十七日発】欧米視察中であつた賀川豊彦氏は十七日正午熱田丸で上海に寄港左の如く語る

……支那の時局問題については内容を熟知せないため語ることが出来ないが全国的にわたり罷業を行ひ各紡績工場を封鎖することは策の最も拙なるもので相手の国を困らせる目的は却って逆に自己の経済を破滅させるわけで現在の状況が持続すれば必ず失業者による突発的な動乱が起ると思ふ、邦人紡績問題についても鐘紡が労働争議から免れてゐた事実からして会社側にも相当欠陥のあることを認めねばならぬ

なほ同氏は上海日本人倶楽部で三日間にわたり労働問題につき講演し一方支那側の有力者余日章氏の請に応じタウン・ホールで支那労働者に対して演説を試み廿日の上海丸で帰国するはず⁽³⁰⁾

ところで、賀川は、到着した17日は、上海日本人YMCAの歓迎会や、長崎を經由して来訪したアメリカの大学生訪中団等を聴衆とする講演会を行つて多忙を極め、中国人労働組合との接触と、当該の「在華紡」を視察する時間的余裕はなかつた筈である。

「美学生観光団来滬」（『民国日報』1925年7月18日）の記事には次のようである。

美国学生観光団团员九人、將於今日（十八）上午乘西伯利亚丸由長崎来滬、該団由美国西部六大学学生代表組織而成、領袖杜白克博士、為奥而根省立大学教授、……今日在青年会聚餐、由方自日本来滬之社会運動名人賀川豊彦氏演講⁽³¹⁾、

賀川は、「日紗廠拒絶日人調停工潮」（『民国日報』1925年7月19日）の記事によると、「在華紡」での争議の解決について意見を求められて次のように答えている。

又日本労働運動領袖賀川豊彦氏因視察労働問題、於去歲赴欧美遊歴、現事畢過返、於前日〔17日〕乘船来滬、定於二十日乘上海丸回国、摠談本埠対日商紗廠問題、謂依照鐘淵紗廠、置身事外之事实、紗廠方面応負其責任之一端、固無待論、至承認工会云云、雖藉口赤化、認為不可、然縱含有共産党分子、而既属正当之組織、以正当之労働問題為目的、即応與以承認⁽³²⁾、

賀川は、労働者に対する福利厚生が行き届いていた鐘紡系の「在華紡」の騒動の程度が比較的軽度であつたことに鑑みて、経営者側が「工会」を承認すべきであり、かつ組合指

導部（総工会）に共産党員がいたとしても、それが正当な組合組織であり労働問題の正鵠を得た要求を提言しているのならばそれも許可すべきであるとの意見を披歴している。

賀川は日本の労働・農民運動の指導者で、日本労働総同盟の幹部でもある。その彼が、日本の資本家側が拒否し、一方では総工会がゼネストの獲得目標とした工会の承認と、総工会に対する理解を主張したのは労働者と共産党にとって福音になったであろう。

これまで賀川には「天皇崇拜者」「反共主義者」というレッテルが貼られてきたが、実際は、彼は共産主義を盲目的に否定していたのではない。その証左として、中国のプロテスタント教会の連合組織である中華全国基督教協進会が1927年に上海で開催した全国基督教化経済会議の講演のなかで賀川は、次のように語っている。

私は共産主義の「共産」の二字に込められた共同体精神には賛成であるし、共産党が専ら美德とする行為を大事にしている⁽³³⁾。

この発言からも、賀川が無闇に共産主義思想を否定する人物でなかったことが読み取れるのである。元来、彼は、青年期からマルクス主義に関心を抱き、明治学院の学生時代から『資本論』を熟読し、その優れた理論を評価している。

賀川は、数度の講演をこなし工場視察を終え、20日に日本郵船の上海丸に乗船して帰国している。上海丸には、争議の調停に乗り込んで来ていた官業組合運動の先駆者である芳川哲が同船していた。「日労働会長昨日回国」（『時報』1925年7月21日）に次のようにある。

日労働運動家賀川豊〔彦〕氏、自到滬後、演講数次、對於工廠、亦曾接洽数次、於昨日與芳川哲同船回国云⁽³⁴⁾、

しかし、帰国後の賀川の談話には、上海で発した「在華紡」側を叱責し、中国人労働者を支持する言葉はない。彼は、中国人労働者の苦境について、神に祈るだけであった。

上海は、暴力の相対峙する所であつた。私は支那の工人の為に悲しむと共に、支那のために悲しんだ。私の船は上海から長崎に着いた⁽³⁵⁾。

ここでは賀川は、上海を暴力が蔓延る街であると語っている。しかし、当時の状況としては、彼が上海を訪れた7月下旬頃には、市内での労働者・学生・市民による破壊行動は

沈静化していた。日本の新聞には、少数の銀行強盗等の報道はあるが、この当時は上海の治安は回復してきていた。

賀川が、労働者・学生・市民と日英帝国主義との武力衝突を「暴力が相対峙する」と表現したのは、おそらく「五・三〇事件」以降の暴動の有様と戒厳下の様子を、上海の内山完造から聞いて推測したからであろう。

また、賀川は、鈴木とともに、半植民地中国の「在華紡」等の外国企業工場で働く中国人民の労働条件の改善をILOに拠って国際労働規約を順守させる方向で考えていたが、その目論見は儂く潰えた。彼が、「支那の工人の為に悲しむと共に、支那のために悲しんだ」と語ったのは、自己の無力感と悲観的現実が複雑に絡み合った言葉ではなからうか。

Ⅲ 芳川哲と「五・三〇運動」

芳川哲は、はじめて官業労働組合を結成した運動家として知られている。官業とは、政府が経営する営利事業を指し、砲兵工廠等がその代表格である。彼の経歴は、地方の師範学校を中退し、日本鉄道附属徒弟学校を卒業後、東京砲兵工廠の旋盤工となり、1919年8月に安達和（1895-?）と同工廠の労働者を組織して小石川労働会を結成し会長になっている。ちなみに副会長は安達である。さらに、同年8月から9月にかけて同砲兵工廠と板橋火薬製造所の労働者を糾合してストライキを指導したため、治安警察法で入獄経験もある。芳川は、大正期の官業組合運動の闘士である⁽³⁶⁾。

また、彼は、1921年4月には官業労働総同盟の結成に参加し、熱心に普通選挙運動にも従事している。官業労働総同盟は、日本労働総同盟が1925年12月に政治路線の対立から分裂して、吉野作造等の呼びかけに応じた鈴木文治等の右派と合体して社会民衆党を結成している。これから、官業労働総同盟が、日本労働総同盟の右派と同じ政治的立場をとる組織であったと推察されるのである⁽³⁷⁾。

ところで、これまで、「五・三〇運動」と日本の労働運動家の関わりを考察する際に、よく紹介されてきたのは久留弘三（政治家、1892-1946）である。彼は、鈴木・賀川の「友愛会」草創期からの同志で、1921年の神戸三菱・川崎造船所の労働争議の先頭に立ったが、組合運動の路線対立から日本労働総同盟とは袂を分かっていった。その彼は、1925年2月に上海を訪れて「在華紡」の工場を視察し、その労働組合幹部とも会談し、報告書「上海邦人紡績罷業の顛末」（『社会政策時報』第56-57号、1925年5-6月）を作成している⁽³⁸⁾。

芳川と「五・三〇運動」との関連について考察する際に、かつて東京砲兵工廠で職工のストライキを一緒に指導した安達和の中国訪問について触れなければならない。安達は、

1921年6月に芳川と活動方針をめぐって対立し、一時袂を分かって日本労働連盟を結成したが、1924年には関係を修復し、芳川の小石川労働会と連合して官業労働総同盟関東同盟会を結成しており、訪中した1925年当時は親密な関係をもっていた。

『民国日報』によると、安達の上海行きについて、1925年6月に官業労働総同盟関東同盟会長の安達和と芦田善は、個人の名義で上海を訪問したとある。例えば、「日労働代表来滬」(『民国日報』1925年6月12日)には次のようにある。

▲詳査南京路惨劇案真相 日本労働界因欲詳査此次南京路惨劇案、特派日本労働連盟理事兼日本紗廠工会長安達和氏及官業労働九州同盟会員芹〔芦〕田善氏、於昨日午後三時、乘日郵船近江丸来滬、拋談此行純以個人名義来滬調査、將充分調査其真相、且願聞労働運動者真實之呼声、並言日本労働界對於此案頗為同情、將募集罷工資金援助、並派応援団正式応援、

彼等は、現地での談話で、個人名義での視察としながら、周到な事件の真相究明と日本の労働界の物心両面の支援を語っている。安達と芦田が個人名義で訪中したのは、上海の行動に対する日本の官憲の監視を逃れる方便であろう。当時、日本政府は、日本の共産党系の労働団体代表が上海に使者を派遣することを嫌い、彼等への監視を強めていた。それは、「上海に行かれてわと……労働者を監視」(『読売新聞』1925年6月9日)等からわかる。

上海の罷業を見舞ひかたがた応援のため都下各労働団体から両三名の代表者を送るべく演説会を開いたが、……⁽³⁹⁾

安達が視察した6月の上海は、「五・三〇事件」によって民衆暴動が激しく市内は戦場のごとき様相を呈していた。彼等は、その騒乱のなか「五・三〇事件」の真実を調査しているのである。帰国後、安達は、芳川に上海の民衆蜂起の有様を連絡していたかもしれない。

それから1カ月後の7月10日過ぎに、芳川哲は上海を訪れ、16日に総工会長の李立三(政治家、1899-1967)等と会談する機会をもっている。このことは、「調停日紗廠工潮」(『民国日報』1925年7月18日)に次のようにある。

日本労働会会長芳川哲氏為調停本埠日商紗廠工潮、特於前(十六)午在法租界李徵五氏宅、與総工会執行委員長李立三等三人会晤、交換意見、……該氏似有成案、拋該

氏語人、「今尚言及承認工会之事、殊属可笑、余依過去之經驗、關於該問題、已有十分之成案、並謂如與紗廠当局之討論終於不成功、與最初未嘗談判之時同、決即回国、糾合日本全国之労働者、共謀解決」云云⁽⁴⁰⁾、

これによると芳川は、上海の小商人の代表であった李徴五の邸宅で李立三との会談に臨んでいる。李立三は、後に都市労働者の組織化と蜂起を主とする「李立三路線」を共産党の戦略に取り入れることを主張した過激派として知られている。

李立三との会談が実現した背景には、芳川の訪中の約1カ月前の6月、同じ官業総同盟の盟友である安達和と芦田善が上海を訪問したことが布石になっているのではなかろうか。

ところで、芳川哲は、李立三との会談の席で、「いまなお工会の承認などについて言うのは、殊にお笑い草である。過去の経験に引き合せると、この問題についてはすでに十分見込みがあるが、もし「在華紡」の経営者側との交渉が不首尾に終わり、協議に入る前と変わるところがなければ、即刻帰国して日本の労働者を糾合して、問題解決にあたる」と豪語したという。しかし、彼は官業組合の一組合長でしかなく、日本全体の労働組合を指揮することなど出来る筈もなく、談話の内容は大言壮語と感じられる。

また、芳川は、7月10日過ぎから上海に逗留して積極的に労働組合員（総工会）と交流し、7月20日に賀川と同船で帰国している。「日労働会長昨日回国」（『時報』1925年7月21日）には次のようにある。

日本労働会会長芳川哲氏、日前来滬、力謀解決工潮、奔走接洽、数日来並無十分円満之結果、双方如無誠意的讓歩、終難得達目的、芳川哲氏以前途難抱樂觀、遂於昨日乘上海丸回国、擬下月間再来上海、又日労働運動家賀川豊〔彦〕氏、自到滬後、演講数次、對於工廠、亦曾接洽数次、於昨日與芳川哲同船回国云、

芳川は、16日に李立三に対して自信に満ちた大言壮語を吐き、数日にわたって調停をおこなったようだが、労働争議の調停には失敗した。しかし、彼は、調停が不首尾に終わったにも拘わらず、自分の能力を銜って今後の争議に対する樂觀的な見通しを述べ、再度上海を訪れることを宣言しているのである。

また、彼が、賀川と同船で帰国の途についているのは偶然かもしれないが、中国人民に対して彼と賀川の親密さを予想させたとすれば、総工会側に日本の労働組合の支援活動を期待させたかもしれない。

思うに、賀川が18日に総工会が共産党の色彩の強い組織であることを承知のうえで、彼等の闘争目標だった「工会承認」を正論として支持表明したことは、芳川が16日に李立三に語った「今尚言及承認工会之事、殊属可笑」、つまり、労働組合の公認は言ってみればお笑い草の当然の権利であるとの大げさな発言に、真実味を帯びさせたのではなからうか。

日本の「在華紡」企業は、大阪で合同会議を開いて、総工会の「工会承認」要求については断固拒否する声明を出している。ただ、北京政府が工会に関する条例を制定するならば考慮するとの付言をつけている⁽⁴¹⁾。

芳川は官業の労働組合に所属し、鈴木と賀川は民業が主の労働組合に所属していたが、「五・三〇運動」に対する認識に相違はなかったと思われる。しかし、鈴木と賀川が、「在華紡」の争議の問題点に対する情報を交換する部分が多かったと思われるのに対し、芳川にはそれはなく、独自に情報を収集し調停工作に動くことになったのではなからうか。

しかし、芳川は帰国後間もない1925年12月、連携していた彼の小石川労働会と安達の日本労働連綿がともに官業労働総同盟から除名されたため、その後の消息は不詳である。彼等の足跡が途絶えるとともに、彼等の「五・三〇運動」における行動も忘れ去られた。

おわりに

鈴木文治は、1924年の上海で開催された第1回メーデーに参加し、中国人労働者に「支那の兄弟よ」と叫んだという。彼は、中国の労働者との連帯を宣言したのである。彼は、半植民地の中国の労働問題を解決する手段としてILOを利用しようとした。彼は、ILOで決議された国際労働条約案を適用させるのが半植民地の労使紛争を解決する最善の方策であると考えていたのであろう。しかし、その目論見はずれ、彼はILOを見限り、かわって日中印3国の労働者の大同団結に労使紛争解決の希望を託したのである⁽⁴²⁾。

賀川豊彦は、アメリカの排日法に憤り、「五・三〇運動」における中国人民の反日運動にも衝撃を受け、日本が東西両国から排斥される現実に焦燥感を懐いた。彼は、はじめILOに期待したが虚しい結果に終わり、上海を訪れ、反共主義をかなぐり捨てて総工会を評価し、その運動方針（「工会」の承認要求）に賛同した。

帰国直後、彼は「私は支那の工人の為に悲しむと共に、支那のために悲しんだ」と語ったという。おそらく、彼は中国の労働者が帝国主義政府の抑圧に苦しむだけでなく、経済搾取の矛先にされることを慮る真情を吐露したのであろう。

芳川哲は、出身組合が官業であり、鈴木、賀川等に影響されることなく別行動をとるこ

とが許されたのであろう。彼が、労働組合を代表して上海に赴き、総工会長李立三と会談して調停工作に関与したことは日中労働運動史上の秘話である。しかし彼は、小石川労働会が官業労働総同盟から除名されたことによって、これ以後労働運動界から姿を消し、その後彼の「五・三〇運動」での働きは忘れ去られてしまった。

鈴木文治、賀川豊彦、芳川哲が、1925年、「五・三〇運動」前後の上海でとった行動は、日中戦争前夜の日中労働運動史の希少な実践であるのにも拘わらず、これまで、その歴史的意義を検証されることがなかった。彼等の行動は、日中友好史における貴重な一齣である。彼等の想いは、日本農民組合長杉山元治郎によって、総同盟の臨時大会の決議文のなかに「アジアの有色人種の労働者の団結」という文言で残されているのである⁽⁴³⁾。

註

- (1) 江田憲治「在華紡と労働運動」森時彦編『在華紡と中国社会』京都大学学術出版会、2005年、同「上海五・三〇運動と労働運動」『東洋史研究』第40巻第2号、1981年9月。
- (2) 横光利一『上海』講談社、1991年、183頁。
- (3) 小杉修二「上海工団連合会と上海の労働運動」『歴史学研究』第393号、1973年2月。
- (4) 高綱博文「日本紡績資本の中国進出と『在華紡』における労働争議」歴史学研究会編『世界史における地域と民衆（続）』青木書店、1980年、同「上海「在華紡」争議と五・三〇運動——顧正紅事件をめぐる——」中央大学人文科学研究所編『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版部、1999年。
- (5) 「今日為五一労働記念節、此次被挙為出席第六次国際労働會議之日本労働代表鈴木文治氏、今日乗日郵船香取丸抵滬、該船預定五月三日晨開赴欧州、同船者尚有日資本家代表上遠野雷之助氏、……、及出場巴里万国運動大会之日本選手団、……而日労働代表鈴木氏與東北帝大教授三枝博士、則應日僑青年會之請、將於今明晚分別在蓬路日人俱樂部演講、上海泰晤士報云、……聞氏將於星期五午後、在復旦大學演說、同日晚在蓬路日本人俱樂部演說」（「日労働代表來滬」『民国日報』1924年5月1日）。
- (6) 「大正庚申九年……五月一日のメーデーが中国でも始めて北京、広東、上海で行われると云う前景気はなかなか盛んであった。たまたま青年会主事前田寅治君が、その前日に渡欧の途上陸した鈴木文治（労働総同盟の領袖）氏外を同道して来て、明日一日滞在されるから何処か案内して欲しいとの依頼があったので、それでは明日天后宮で中国初めてのメーデーがあるから一つ御案内しましょうとお約束した。確か鈴木文治氏と松岡駒吉氏と外に一人同伴者〔西尾末広〕があった。私が案内役で浙江北路の天后宮会場へ出かけた。庭は労働者学生などで一パイであった。楼は主催者達で一パイであった。私達が上って行くと汪兆銘先生や施存統先生が居ったので早速紹介したところが、これ幸いと先ず鈴木先生に演説して呉れと云うことで中国最初のメーデーの第一席の講演者は鈴木文治氏で第二席が汪兆銘先生と云う奇しき結ばりが出来たのである。この日鈴木さんの第一声は「支那の兄弟よ」と云う呼びかけであった。私は今も覚えている。汪兆銘先生は、「勞工八個鐘頭、讀書八個鐘頭、睡覺

八個鐘頭」と八時間制を叫ばれた。上海のメーデーは記せずして日支両巨頭によって出発したのである。」(内山完造『花甲録』岩波書店、1960年、113-114頁)。この記事は、『花甲録』では1920年のこととされているが、実は1924年のことであり、内山は記憶違いをしている。

(7) 西尾末広「上海の労働運動」『労働者新聞』第111号、1924年6月1日、に次のようにある。

五月一日、午前十時上海に上陸。我々の一行はこの地のメーデーに参加すべく、一寸、日本基督教青年会に立ち寄つて、午後二時頃、会場に趣いた。会場は支那総商會に隣接した天后宮の空地であつて、門前には若い組合員が入場者に対して、いちいち印刷物を配布してゐる。門内へ這ると受付けがあつて求められる、まゝに署名すると。

『……』

何だか分らないが兎に角非常に歓迎されて、幹部室とでも云ふべき楼上の演壇の後の室に導かれた。……

演壇の後ろには『上海工団連合会五一労働紀念会』と大書した貼紙がある、奏樂の後に開会の辞が述べられて、その後三四の労働音の短い演説があつたが元より内容に就ては知るよしもないが、……

続いて、亜細亜教會の領袖印度人のシヤストリー氏、及び国民党の王〔汪〕兆銘氏、米國婦人アンダーソン夫人等の演説がありて後非常なる拍手に迎へられて鈴木会長並びに私〔西尾末広〕は通訳附にて演説を試み、日支労働者提携の第一歩の素因を作り得たのである。

会場には婦人運動者や女工も十七八人来てゐたので、通訳を煩はして會話を試みた。

相手は穆志英とて上海縵紗女工協會々長で当年四十四歳の女丈夫である。……組合員は当時十三万人もあつたのだが罷業以來非常に困難な状態である。……

五月二日の午後、私は通訳の嚴淞君と自動車を駆つて虹口岳州路鳳鳴里三五四の上海工団連合會の事務所を訪れた。……

私は先づ総同盟の機関紙、徽章、小冊子等を贈呈して、日本の労働組合運動の実情を紹介し私自身の立場をも明かにして置いて、通訳を通じて上海に於ける組合運動の大体を知る事が出来たのである。

上海工団連合會は四月の初めに三十二個の労働団体を連合して組織したのであつて會員の総人員は二十五万人ある。そして最も會員の多い団体は、上海縵紗女工協會の十三万人 上海紡織工会の八万四千人であつて一番財政の裕なものは、南洋煙草職工同志會（組合員五千人）である。

然し茲に注意すべきは、會員数の多いのに驚いてはならない事である。

現在の上海の労働団体のメンバーは、一般的には教育の程度が非常に低く随つて自覚もないから、會費等は定まつて取つてゐないのである、故に嚴密には組合員と云ふよりは「組合幹部の勢力下にゐる労働者」と云ふ方が適當であらう。

猶、此の連合會の機関としては九つの専門部——經濟、宣伝、交際、會務、文書、調査、衛生、教育、遊芸——より成り各部に委員長があつて総ての事は此の委員の合議によつて決まる事になつてゐる。

次に思想的方面は、一九二〇年の夏、当時露西亞共產黨極東代表者、ボタポツフ氏が此の地に来て共產主義の宣伝に力めたり、また、陳独秀氏が是れに呼応したために、共產主義が一般に謳歌されてゐたが、其の後、陳氏等の一派に内紛が起つたり陳氏の

個人的な批難から共産主義は餘程衰へてゐる。

- (8) 「此次出席万国労働会議之日本労働代表鈴木氏等、因赴欧過滬、曾于一日參與五一労働紀念大会、二日復於蓬路日人俱樂部、與汪兆銘、謝作舟諸君接洽一切、是晚在該俱樂部演講労働運動之國際的協力、已於三日上午十一時許乘原船香取丸赴欧、其在該俱樂部演講之大旨、……且將進而與世界之労働者提携、而謀世界平和之實現、如現在之白色人以我等東洋人認為一種劣等人種時、我等必與之對抗、而因此須先謀亞細亞民族労働者之提携、要之我等之終生目的、即在亞細亞民族労働者之提携云」(「日労働代表昨午赴欧」『民国日報』1924年5月4日)。
- (9) 香川孝三「戦前期日本の労働組合とアジア」(1)(2) 神戸大学国際協力研究科『国際協力論集』第3巻第2号・第4巻第2号、1995年12月・1996年12月。
- (10) 上条愛一「上海の労働者諸君と語る 四月十二日鹿島丸にて」『労働者新聞』第132号、1925年5月20日。『民国日報』、『時報』には、鈴木等の上陸は午前7時とあり、上条の記事には午後1時入港とあり、時間差がある。
- (11) 朱潤斌については、前掲小杉「上海工団連合会と上海の労働運動」に経歴と連合会での役割が紹介されている。
- (12) 前掲江田「上海五・三〇運動と労働運動」。
- (13) 古厩忠夫「労働運動の諸潮流」『講座中国近現代史4五・四運動』東京大学出版会、1978年、同「五四期上海の社会状況と民衆」『日中戦争と上海、そして私——古厩忠夫中国近現代史論集』研文出版、2004年。
- (14) 前掲小杉「上海工団連合会と上海の労働運動」。
- (15) 前掲上条「上海の労働者諸君と語る」。
- (16) 「国際労働総会で鈴木会長等の奮闘 ジュネーブからの便り」『労働者新聞』第135号、1925年7月1日。同様の記事として、「東洋労働者の大同団結 鈴木氏の首唱で諒解成る」『東京日日新聞』1925年6月25日、に次のようにある。
- 去月ジュネーブで開かれた第七回国際労働会議をすまして帰途目下ロンドンに滞在中の鈴木文治氏から廿四日総同盟関西同盟会への消息によると氏は同会議中日本労働運動の国際労働運動加入のことについてしばしば各国労働代表と会見し特に隣接国支那ら完全に労働代表を選出せしむるためインド労働代表と協力しこれが主張を会議に提案し更にインド代表と東洋労働者の大同団結を計るためインド支那日本の三国からなる東洋労働者代表者会議を開くことに完全なる諒解協議を遂げたと。
- (17) 同前。
- (18) 松尾尊兌「友愛会史論」『大正デモクラシーの研究』青木書店、1966年。
- (19) 「年表」賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1964年。日中のキリスト教に関する論考としては、山本澄子『中国キリスト教史研究』山川出版社、2006年、布川弘『平和の絆——新渡戸稲造と賀川豊彦、そして中国』丸善、2011年、があるが、賀川と「五・三〇運動」に関する記述はない。
- (20) 『颱風は呼吸する』賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』第17巻、キリスト新聞社、1963年、446頁。
- (21) 隅谷三喜男『賀川豊彦』日本基督教団出版部、1966年、松尾尊兌「大正デモクラシーとは何か」『大正デモクラシーの群像』岩波書店、1990年。
- (22) 賀川豊彦『雲水遍路』改造社、1926年、30頁。
- (23) 賀川豊彦「身辺雑記」前掲『賀川豊彦全集』第24巻42頁。

- (24) 前掲賀川『雲水遍路』330頁。
- (25) 前掲賀川「身辺雑記」43頁。
- (26) 上条愛一『労働運動夜話』一燈書房、1950年、83頁。
- (27) 「欧米諸国を説教旅行中の賀川豊彦氏は三月アメリカからイギリスに渡り、各教会、労働組合および議会の委員会などで講演を試み或時は一日に数回演壇に立つことさへあつたが五月廿九日イギリスを去つてフランスに向ひ、六月まで大陸を旅行し、六月十九日熱田丸でコロomboに出で、……なほ同氏がインドに立寄つてガンヂーと会見することを英国政府は非常に嫌つて、旅券の裏書に九日間も待たせた上「インドでは決して物議をかもしませぬ」との約束で漸く裏書したといふ」（「四貫島の労働者街に善隣事業を始める 八月中旬帰朝の賀川豊彦氏 ガンヂーとの会見に英政府の心配」『大阪毎日新聞』1925年6月1日）。「ヤボク河を渡る——心の整理と社会の整理——」『雲の柱』第4巻第9号、1925年9月1日、にも旅程が記されている。
- (28) 「日本労働会長来滬」『民国日報』1925年7月18日。「日本労働運動領袖来滬」『時報』1925年7月18日、は『民国日報』の記事と同じ内容であるが、「崇信耶穌之博愛主義學問道德」の語句が入っている。
- (29) この紹介文には、実は先行するモデルがあった。同じ『民国日報』の3年前（1922年）の副刊『覚悟』に夏丐尊（文学者、1886-1946）が賀川を紹介した文章である。この文章が書かれた当時の『民国日報』の編集長は邵力子（政治家、1882-1967）である。邵力子は初期の共産党員として知られ、総工会の幹部でもあり、1924年の中国初のメーデーの際に鈴木文治とも面識をもった。彼が『民国日報』の紹介文を考案したのかもしれない。「賀川豊彦氏は個日本有名的基督教社会主義者、同時是個文学家。同情於貧民、投身貧民窟多年。他底著作很富、拙我所看過的有『越死線』、『射太陽者』、『貧民底心理』、『溼底二等分』、『人間苦與人間建築』等幾種。」（丐尊「賀川豊彦氏在中国的印象」『民国日報』副刊『覚悟』1922年7月14日）。
- (30) 「各国の労働状態を視察して来た賀川豊彦氏談」『大阪毎日新聞』1925年7月18日。鐘紡社長の武藤山治（1867-1934）は、ドイツのクルップに範をもつ「温情主義」を唱え社内の職工の待遇改善に尽力した。彼は社内報の発刊、共済組合の設置を行い、労働争議がおきない模範的な会社運営をおこなった。
- (31) 「美学生観光団来滬」『民国日報』1925年7月18日。
- (32) 「日紗廠拒絶日人調停工潮」『民国日報』1925年7月19日で、賀川はこれに続けて、「又日僑蘇生有致日商紗業公会一信、主張早日解決、從速開工、謂如以既往曠日持久之策对付交涉、紗廠公司雖得有利之解決、而因此日本国家及日人之犧牲甚大、且如發生南京路案第二、解決遷延、發生事端一次、中日人間輒增惡感一次、日本国家百年之大計遂將無策可施、故此際無関大局之事、希望隱忍若干犧牲、從速解決開工」とも語り、争議の早期解決を求めている。
- (33) 「日本社会運動」中華全国基督教協進会編『基督化經濟關係全国大会報告』1929年、に「此（大逆事件）一九一〇年也。四年後（Bunji・Suzuki）始組織互惠社（友愛会）、一個真的劳工運動、此時我尚在窮民窟中、我不喜歡入互惠社。因我此時帶有「赤化」以為（Bunji・Suzuki）的運動、是「白党」的。他們要我去演講、我終不是親去、免致施以激刺。……我們以為若俄国的共產党真屬慈善的機關、我們亦願加入。但他們是独裁的和暴動的革命、不顧少數的意見。……日本全国農民協會六年前在我小禮拜堂内所組織的。我的主張、祇要組織。不

是要做会長」とある。

- (34) 「日労働会長昨日回国」『時報』1925年7月21日。
- (35) 前掲賀川『雲水遍路』514頁。
- (36) 「芳川哲」「安達和」『日本社会運動人名辞典』青木書店、1979年、22、611頁。
- (37) 隅谷三喜男『日本の社会思想——近代化とキリスト教』東京大学出版会、1968年、98-136頁。
- (38) 「父は上海へ行く。六月〔二月の誤り〕、父を迎えた現地の新聞は一斉につきのように報道した。「今次日商廠罷工で日本の資本家は多数調査のため来滬した。しかし労働界ではわずかに労働文化協会の久留弘三氏のみである。氏は昨日来、工人各方面と接触している」。また、その帰国に当っては「罷工の情形を調査した労働文化協会領袖久留弘三氏に対し、各工団均しく歓迎、茲に於いて和解……」と。帰国した父は大阪中央公会堂で「支那及び支那労働運動」と題し、講演。日中労働者の提携を訴え、在中国日本資本の横暴を暴露している。」(久留正義『黎明期労働運動と久留弘三』日本経済評論社、1989年、187頁)。
- (39) 「日本労働総同盟 まだ動かぬが援助せん」『東京朝日新聞』1925年6月5日、にも関東の労働組合が上海に代表を送ろうとしていたと記されている。
- (40) 「日労働会長調停工潮続訊」『時報』1925年7月18日、も同じ内容である。
- (41) 「【大阪電話】 紡績連合会の支那関係会社は上海の最近の情報をもたらして帰阪せる内外綿花頭取武居氏を待ち十八日午後六時より大阪ホテルに会合上海事件に対する根本方針を協議した……今後の方針を満場一致左の如く確定した 一、現在の工人会は絶対に之を認めないが支那において工場法労働組合法治安維持法等の諸法規が制定されこれが完全に行はれた時は考慮すること」(「紡績連合会の腹漸く極まる」『東京朝日新聞』1925年7月19日)。
- (42) 前掲香川「戦前期日本の労働組合とアジア」。
- (43) 「総同盟十四年度臨時大会に対する希望」『労働者新聞』第141号、1925年10月1日。